小説を考える

変転する時代のなかで

黒井千次：群棲
日野啓三：夢の島
高井有一：この国の空
田久保英夫：海図
大江健三郎：懐かしい年への手紙
中上健次：地の果て 至上の時
富岡多惠子：逆髪
大庭みな子：啼く鳥の
村上春樹：世界の終りと
ハードボイルド・ワンダーランド

菅野昭正

講談社

小説を考える

変転する時代のなかで

菅野昭正

講談社

小説を考える——変転する時代のなかで

一九九二年一〇月一二日　第一刷発行

著者——菅野昭正（かんの あきまさ）

© Akimasa Kanno 1992, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二—〇一

電話　出版部（〇三）五三九五—三五〇四

販売部（〇三）五三九五—三六二二

製作部（〇三）五三九五—三六一五

印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——和田製本工業株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN 4-06-205498-1　（文1）

目次

現代家庭小説考——黒井千次『群棲』をめぐって　5
都市の書かせる物語——日野啓三『夢の島』をめぐって　41
あの青空を遠く離れて——高井有一『この国の空』をめぐって　71
エロスの中心と周辺——田久保英夫『海図』をめぐって　99
根拠地の思想——大江健三郎『懐かしい年への手紙』をめぐって　131
地の果ての向うには……——中上健次『地の果て　至上の時』をめぐって　159
迷宮のなかをヒトは歩く——富岡多恵子『逆髪』をめぐって　191
鳥たちの行方——大庭みな子『啼く鳥の』をめぐって　229
終りからのメッセージ——村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』をめぐって
あとがき　290

装幀　山崎　登

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

小説を考える——変転する時代のなかで

現代家庭小説考

——黒井千次『群棲』をめぐって

I

狭い路地を隔てた向かいの家へ回覧の「町会だより」を届けにいった初老の主婦が、すっと若い、たぶん三十歳代の相手の主婦から、家庭のなかの悩みごとを唐突に訴えられる。悩みごとというのは、別居中の舅姑と同居する問題がおこっていること、夫が「変な女にひっかかったりして」いることである。初老の主婦のほうは聞き役になってやろうという気持になり、「よかったらうちに話しに来ないか」と誘う。

平素さして親しくもないのに突然悩みを打ち明けられる恰好になった以上、立話だけで突き放してしまうのは気が咎めた。と同時に、世代も異り、別の世界に生きているとばかり思っていた若い主婦が、雅代にも覚えのあるような悩みを洩らしたために急に身近に感じられたのも事実だった。

現代の都市における家庭生活のさまざまな情景を積みかさねてゆく小説のなかで、こういう場面に出会ったとき、一瞬とまどいを感じる読者は少なくあるまい。私もそのひとりである。そこでしばらく立ちどまって、それまで展開されてきた小説の世界の様相を、もう一度ふりかえってみたい気分になる。

といっても、老齢の両親との別居、夫の浮気というありきたりの家庭の事情が、読む意識の歩行をせきとめたりするわけではない。一瞬にせよ、小説の展開に黙ってついてゆけない状態が出現するのは、この二人の主婦が、十年以上も狭い路地ひとつ挟んで暮らす間柄であるのに、「平素さして親しくもない」という説明が飛びこんでくるからである。年代が少しばかり違っていても、また生活様式に多少の差があっても、もっとも近い地縁でつながっているのだから、二人の主婦はもう少し親密であってもよいのではないか、それがむしろ家庭生活の常態なのではないか……。

「〝向う二軒片隣〟の関係にあるこれら四軒の家を主たる舞台とする」黒井千次『群棲』には、その種の疑問を誘いだす個所が何度か出てくる。隣近所と交渉する機会がめっきり減って、隣人との関係が疎遠になってゆく傾きが、当今の都市生活において大きくなる一方であるのは、誰にしても否定しようのない事実であろう。が、傾向はたしかに存在しているとしても、近所づきあいがいっさい消えるまでにはなっていない。この二人の主婦のような間柄であったら、なにか特別な争いごとがないかぎり、たとえ表むきだけにせよ、もっと親しげに振舞うのが、現実にはむしろ普通に見られる光景なのではないか。そんな反応が、読む意識を立ちどまらせるのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

現代の都市生活情景の実態を忠実に写したものではないこの種の細部は、しかし作者の不用意によって産まれたわけではない。作者は書こうとした通りに書いている。同種の小さな例がほかにもいくつか見当たることだけをもってしても、それは十分に裏づけられる。

たとえば、サラリーマンをやめ、自宅で翻訳して暮らしている三十歳すぎの男は、誤配された郵便物を隣家の息子がもってきたとき、辛うじて「隣の安永家の次男らしい」（傍点筆者）としか認められない。隣家の息子が大学生であることも知らないし、名前さえそのときはじめて教えられる。また、停年の年齢に達したサラリーマンの妻である老婦人は、まばらな庭木を垣根がわりにして接しているだけの隣家の小学二年生の娘に、「ええと、織田さんの真由ちゃんでしょう」（傍点筆者）と話しかけるし、その娘の父親にとって、隣家の老婦人は、「これまでほとんど言葉を交したこともない相手」であるにすぎない。垣根もろくにないような暮らしかたをし、昨日や今日はじめて顔を合わせたのでもないこの人物たちが、隣人の名前さえ知らず、隣人とほとんど話をしたこともないというのは、考えようによれば過度なほど作為的である。

この種の細部の挿話には、『群棲』が現実にたいしてどういう距離をとっているか、小説を織りあげる糸を紡ぎだす場所をどこに置くかということについての、作者の判断と選択が示されている。実際の生活情景と認められるものにたいして、ただ律義に忠実であろうとするだけの、平板なリアリズムに逆らおうとするしるしが、そこには見てとれる。隣近所との交際をなんとか保ちつづける習慣は、たいへん稀薄になったにせよ、現代の生活のなかで、実際にはまだ決して消えていない。にもかかわらず、そういう実態をあえて小説から遮断するのは、未来につながる筋道はそちら

にないと作者が判断したからである。小説のなかにそれを導きいれようものなら、都市生活の現代的な様態が凝縮されるどころか、古い局面がかえって濃厚に反映されることになりかねないという見通しに、作者は立っている。

隣人どうしがよそよそしく振舞う細部に一瞬とまどったあと、『群棲』の読者は、近隣関係の疎遠化が、現代の都市生活で、急速に進みつつある現象であることに思いあたるだろう。日々の生活のさまざまな局面で、隣近所ともたれかかりあうようにして暮らす、陰湿と濃密がまざりあった関係から脱けだして、わが家のドアを外部にたいして密閉し、外部からの風圧に家庭を侵させまいとする生活意識は、まだ都市の日常生活をすっかり覆いつくすところまで行っていないかもしれない。だが、事態は留めようのない勢いでそちらの方向へ動いている。現在のなかに未来を顕在化させつつあるその傾向が、ここではことさら増幅されているのが認められさえすれば、いったん立ちどまった読む意識のほうも、また歩行しはじめるだろう。

この「向う二軒片隣」が現代の都市生活者の家庭の典型という資格を要求することができるとすれば、それは都市生活者の実態についての観察にそのまま乗っているからでなく、徴候がそこに掬いとられているからである。作者が確かな徴候を読みとった地点で、『群棲』は書かれている。それはつまり、明日の都市生活を覆いつくす状態を予知するかのように、疑うべからざる勢いで現在のなかを流れる疎遠化という現象を拡大増幅したところで、小説のリアリティーの基礎が固められているということである。

しかし『群棲』の近隣関係は、ただ疎遠化の傾向を拡大増幅するばかりでもない。この近隣関係

には、別の卑近な要素も溶けこまされているが、それもぜひ書きそえておく必要があろう。というのも、それがこの連作小説のリアリティーを高める役割の一端を担っているからである。

「向う二軒片隣」に群れて住む四軒の家族は、隣家のドアの内側の事情に、いっさい素知らぬ顔をするほど潔癖であるのではない。向かいの家の若い主婦が、たびたび深夜近く車で出かけるのが、停年間近の老夫婦の噂の種になる場面もあるし、その老主婦がまた、夜遅くまで外出することの多い隣家の主婦はどこで何をしているのか、あれこれ臆測する個所もある。脱サラリーマンの三十男は、隣家の大学生がガール・フレンドと戯れているのを窓越しに見て、その情景に興味をもったりもする。

彼らはまた好奇心の動物でもある。隣人への無関心を生活の原理のようにしながら、ときには隣の子供の躾について、隣家の主婦の行動についてあれこれ無償の噂話を楽しんだりする一面が示されるせいで、作られすぎた人物という悪い印象から彼らは遠ざけられる。そこには小説作者の作為の知恵が働いているが、いずれにせよ彼らは小説の人物として、骨と肉を適度にあたえられるのである。

けれども、彼らの好奇心は則を越えない。いや、そんなふうに彼ら作中人物を持ちあげるより、隣家とのあいだに見えない隔壁を立てるという原理と抵触することなく、彼らに好奇心の動物の衣を程よく着せた作者の平衡感覚をこそ、ここでは強調すべきであろう。ところどころに仕掛けられたこの手の噂話を通して、疎遠化という阻みようのない趨勢のなかで、その趨勢に逆らうように、孤立した家族であることに耐えきれぬ心情の噴きだす瞬間があるということも、見えてくるのであ

る。それにまた、群棲という無表情な題名に隠された皮肉な含蓄の一端も、この好奇心の瞬間から汲みとれるにちがいない。

ところで、「向う二軒片隣」という言いまわしから連想されるのは、「向う三軒両隣」というかつての慣用の表現である。そして『群棲』の「向う二軒片隣」のあいだの近隣関係（空白に近づく傾向にある関係）は、ある種の対照の妙が働くせいか、かつて昭和二十年代から三十年代にかけて、「向う三軒両隣」の生態を書くことを標榜した梅崎春生の小説を思いださせるところがある。「庭の眺め」、「空の下」、「凡人凡語」など梅崎春生の「向う三軒両隣」小説では、隣近所との垣根などあって無きが如しである状態が活写されていた。そこでは、世間なみにごく普通に暮らしているはずの登場人物たちは、自分自身の利害にかかわるとなったら、隣人の領分にずかずか押しいってくるのはもちろんのこと、どうでもよい些細なことについても、相手の思惑などまるで考えもしないで、善意とも、親切とも、お節介ともつかぬ干渉を平気で押しつけてくる。また、隣人たちの暮らしむきにはたえず眼を光らせているし、隣人たちを嫉妬し憎悪しつづけることもめずらしくない。いずれにせよ、この「向う三軒両隣」のあいだには、距離というものがほとんどないし、憎みあい咥(くわ)みあう相手とさえ、かえって濃厚な身内の感情でつながっている。

梅崎ふう「向う三軒両隣」小説には、作者が好んで使った「くぐもった笑い」という言葉が示すように、すべてを戯画化し滑稽化しようとする視点と、反対にすべてをペシミスティックに見ようとする視点とが、ほぼ等分に働いていた。また、その「向う三軒両隣」の舞台に出てくる人物たちは、市井の庶民の位置から一歩も出ようとしないし、自分たちの生活に中流意識の枠をはめような

どとは考えたりもしない。そういういくつかの層において、ということはつまり小説の質として、『群棲』とはすでに大きな距離で隔てられている。

しかし小説の質の差異もさることながら、「向う三軒両隣」と「向う二軒片隣」のあいだに横たわる時間の経過を、ここでは見ておかなければならない。いや、時間の経過そのものというより、時間の経過のもたらした居住感覚、生活様式、階層意識の変動の跡をたどっておかなければならない。ともあれ、三十年という時間の経過のあいだに、現実生活のなかには、さまざまな変動が積算されてきた。それが小説を揺りうごかさないはずはないし、小説のリアリティーを支える場所の転移を要求しないはずはない。愛憎を区別もつかぬようにもつれあわせながら、隣人と肌を触れあうようにして住みあう近隣関係に座標を置く「向う三軒両隣」的なリアリズムから、現在の都市の家庭生活の実態を批評する力がもはや剝落してしまっている状況は、どんなに強弁しても打ち消しようがない。

そういう状況を見晴らしながら、現実の変動の行路に対応する場所を求めて、『群棲』は書かれたのである。

Ⅱ

「向う二軒片隣」の外側には都市がひろがっている。「向う二軒片隣」の四家族にとって、日常的に直接にかかわりあわねばならぬ地域社会である都市。

都市といっても、これは東京へ通勤するサラリーマンの家庭が大多数を占める、いわゆるベッド・タウン的な近郊都市である。大部分が新しく開発された住宅地であるから、歴史的な蓄積に乏しく、したがって独自の性格を欠いた素気ないこの都市は、居住環境としてあまり魅力があるとは言えない。人々はただ家庭を作るためにこの都市へ来る。

けれども、どんなに魅力に薄かろうと、都市生活者の家庭を「主たる舞台とする」小説であるからには、『群棲』はこの居住環境にむかって開かれていなければならないのだ。「向う二軒片隣」に住む人物たちにしても、地域社会＝内＝存在であることを強いられているのだから、「主たる舞台」を外側から包む都市空間とのかかわりは、小説として成りたつために削りおとせない部分を構成するはずである。

にもかかわらず、そういう部分は『群棲』にはあまり見当らない。大学生の息子が二人いる主婦が「駅前デパート」へ買物に出かけ、規格型の商品の並ぶ食品売場で索漠たる気分に落ちこむ個所などが、数すくない実例ということになろうか。「白い発泡材の皿の上にサランラップをかけられた」魚や野菜は、当節どこにでも氾濫する大衆的消費社会の劃一性を示す安手な記号として、そこに並んでいる。彼女が索漠たる気分に落ちこむのは、この都市の居住者の生活の内情を見せつけられた嫌悪感に襲われるからであろうし、いってみれば地域社会との距離の感覚がそこに暗示されているのかもしれない。だが、象徴的効果として、この挿話が強力に働いているとは受けとりかねる。

また、露出狂の男に追いかけられたといって、ある夜、この主婦の家へ逃げこんできた中年女性

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c